災害・国際医療協力隊ティーマット
TMATニュースダイジェスト
2020年4月1日発行
発行 特定非営利活動法人(NPO法人)TMAT
〒102-0074
東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビルディング14F
Tel 03-3263-8136　Fax 03-5214-6664
Email info@tamt.or.jp
制作 一般社団法人徳洲会 広報部

Tokushukai Medical Assistance Team
TMAT News Digest
Non-Profit Organization
No.12
www.tmat.or.jp

第12号発行のご挨拶

大雨や台風による被災地で救援活動

TMAT理事長 福島安義

皆様、いつもNPO法人TMATの活動に、多大なご支援とご協力を賜りまして、誠にありがたく、ここに厚く御礼を申し上げます。

2019年に発生しました国内の自然災害は、大雨や台風による被害が強く、水害、風害、そして夏場の停電や断水、通信障害などが特徴的でした。とくに、8月には佐賀県、福岡県、長崎県を中心とした九州北部大雨、9月には千葉県を中心とした台風15号による強風被害と、これにともなう長期の停電や通信障害の発生がありました。10月には各地で大雨特別警報が発令され、河川の氾濫を引き起こした台風19号による被害がありました。

TMATとしましては、各災害時に先遣隊を派遣し、調査を行いました。その結果、広範な地域に被害をもたらした台風19号により、千曲川堤防が決壊して被害を受けた長野県長野市、および阿武隈川支流域の氾濫によって被災した宮城県丸森町に本隊を派遣し、避難所で災害医療活動を行いました。

また12月には、徳洲会グループと以前から深い交流があり、アフガニスタンの貧しい地域での医療活動に加えて、砂漠化した大地を緑地化するために、大規模な灌漑事業を推進してこられた中村哲先生が、凶弾に倒れられたという訃報が入ってまいりました。TMATとしましても、中村先生に深甚なる哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

避難所生活をより快適に

TMATが各地の被災地支援

台風19号 深い爪痕

国内外で災害医療活動に取り組むNPO法人TMATは、2019年10月12日夕方に日本列島に上陸した大型の台風19号により、甚大な被害を受けた地域で支援活動を行った。秋山川が決壊した栃木県、千曲川が決壊した長野県、阿武隈川が決壊した宮城県、福島県にそれぞれ隊員を派遣、調査活動を実施。長野県と宮城県には本隊も派遣し、長野県では100人超が避難していた北部スポーツ・レクリエーションパーク(北スポ)を拠点に10月27日まで、宮城県では50人超が避難していた丸森小学校を拠点に23日まで、それぞれ活動した。

台風19号の浸水被害で木が倒れ家は泥まみれに(長野県)

感染症対策で衛生活動にも力

台風19号は各地で猛威を振るった。国土交通省は2019年10月20日、河川堤防が決壊したのは7県71河川で135カ所と発表。警察庁は24日、死者は13都道府県で76人と発表した。徳洲会グループの病院や介護施設では、一部で停電があったものの機能維持に影響は出なかった。

TMATは13日朝から情報収集を開始。TMATの福島安義理事長(一般社団法人徳洲会副理事長)は、先遣隊の派遣を視野に検討を進めるよう指示を出した。まずは先遣隊として栃木県に5人、長野県に3人の派遣を決定した。

栃木県に出動したTMATは同日夕方、県庁での医療調整ミーティングに参加。翌朝、獨協医科大学内の対策本部でミーティング後、他団体と合同で避難所の調査を実施した。栃木市内では避難所が集約され始めており、開設している避難所も市職員や保健師が連携し対応可能であることを確認。佐野市・足利市でも自宅などに帰宅できる人が増え、避難者の管理もできていると評価。夕方、獨協医大で調査結果を報告し、栃木県内での活動を終了した。

避難所内を巡回し避難者の健康相談(中央が鈴木医長、長野県)

長野県に出動したTMATは13日夜、県庁や長野赤十字病院で情報収集。翌朝、同院内の対策本部でミーティングに参加した。現状では患者搬送ニーズが高く、避難所の支援には手が回っていない状況のため、先遣隊は長野市保健所と協議し、他団体と合同で5チームをつくり、長野市内の避難所17カ所を調査。夕方、保健所内でのミーティング結果を受け、TMATは本隊派遣を決定した。

同日夜に先遣隊第2陣3人が長野県に到着、合流し、避難所である北スポでの当直を開始。翌日から北スポでの保健衛生活動や健康相談などを本格的に始めた。まずは避難所内の衛生環境を整備。避難所内を土足禁止にするため、畳で区切って靴脱ぎ場を作成。トイレ後の手洗いを徹底させるため、ハンドソープや紙タオル、消毒液を仮設トイレの前に配置し、自然な流れで手洗いができるように工夫した。

環境整備や巡回に注力

先遣隊第2陣として現地入りした福岡徳洲会病院の鈴木裕之・救急科医長は「本来、行政主導で避難所の環境整備を行うべきだと思いますが、経験がないとアイデアも生まれません。TMATには全国の被災地を支援することで蓄積したノウハウがあり、避難所に入った瞬間、何をしなければいけないか頭に浮かびます。環境整備を怠ると、避難所生活を快適に送れないだけでなく、感染症が広まる原因にもなり得ます」と強調。

さらに、避難所内の巡回にも注力。避難所生活が長引くと、自分では気付かないまま体調を崩していることもあるため、潜在的な患者さんを見つけ出すことが重要だ。今回は災害処方箋が発行できなかったため、応急処置をしたり地域の医療機関につなげたりして、避難者の健康を守った。

同時に避難者リストも作成。避難者が、どのような持病を抱えているか、常備薬は手元にあるかなど巡回による面談で把握し、長期的に対応していくのが目的だ。鈴木医長は「これも本来は地域の保健師が主導すべきですが、今回の初動では、医療チームと保健チームが別々に動き、うまく連携できていない印象でした。そのため保健所内で毎朝行う医療調整ミーティングで、毎日両チームの情報を共有し、各避難所に固定の保健師を配置することを提案しました」と振り返った。

また、鈴木医長は「今回の台風19号は被害が大きく、活動地域が分かれ、期間も長期にわたったため、TMAT内でも経験者がばらけました。長野県での活動も、本隊隊員は未経験者が多かったため、なるべく避難所の〝完成形〟を見せて、工夫したポイントを指導したり、これから行うべきことを引き継いだりしました。将来のTMATの活動に備え、経験者を増やすことも課題だと思います」と展望。

避難所を視察に訪れた安倍首相がTMATを激励(長野県)

20日には安倍晋三首相と内閣府大臣政務官の今井絵理子・参議院議員が避難所である北スポを訪問。TMATに対し激励の言葉を送った。長野県では15日間、合計23人の隊員が活動。27日にすべての活動を終えた。

断水した避難所で改善活動

宮城県では15日から先遣隊3人が活動を開始。県庁と仙南保健所でミーティングに参加した。翌日、TMATは同時期に活動を開始したNPO法人AMDA(岡山県)と協働し、丸森町の主要避難所である丸森小学校を担当することに決定。丸森小に到着後、すぐに避難所アセスメントを始めた。

避難者が生活する体育館は土足のままの状態、トイレもパーテーションで区切られた介助者用がひとつのみだったため、迅速な環境整備が必要だった。また、電気は復旧したものの、上下水ともに断水しており、復旧までに1カ月を要する状況だった。

(2面に続く)

TMATによる台風19号支援活動

10月12日		大型の台風19号が日本列島に上陸
10月13日	栃木県	先遣隊5人を派遣
	長野県	先遣隊3人を派遣
10月14日	栃木県	他団体と合同で避難所調査、活動終了を決定
	長野県	他団体と合同で避難所調査、本隊派遣を決定、先遣隊第2陣3人が合流、当直を開始
10月15日	宮城県	先遣隊3人を派遣、情報収集
10月16日	宮城県	仙台病院チーム(日帰り)3人が合流、本隊派遣を決定、当直を開始
10月17日	長野県	本隊第1陣8人が合流
	宮城県	本隊第1陣5人、仙台病院チーム4人が合流
10月18日	宮城県	診療活動を開始、仙台病院チーム3人が合流、福島理事長が視察
	福島県	先遣隊2人を派遣、情報収集後、活動終了を決定
10月20日	長野県	本隊第2陣3人が合流
10月21日	長野県	本隊第2陣3人が合流
10月23日	宮城県	活動を終了
10月27日	長野県	活動を終了

（1面から続く）

同日、ダンボールベッドを設置予定だったが、避難所内の清掃、ゾーニングなどを避難者に説明したうえで実施すべきと関係者に助言し、翌日にもち越し。夜、避難者に説明を行った。

17日の作業内容は事前にタイムスケジュールを作成し、行政や自衛隊、DMAT（国の災害派遣医療チーム）と共有。当日はTMATが中心となり、100人近いスタッフが体育館の清掃、ダンボールベッドの設置などを行った。午後3時頃には、すべての作業を終え、別室に荷物とともに移動していた避難者を体育館に誘導。土足禁止エリアを明確にし、出入り口をひとつにして靴箱を設置するなど環境整備した。

18日から災害処方箋の発行が認められ、丸森町役場に臨時救護所とモバイルファーマシー（災害対策医薬品供給車両）が設置された。丸森小でも緊急患者さんや処方切れ患者さんに対する処方を開始。

TMATは①診療や避難所アセスメントを行う医療チーム、②保健師と一緒に避難者リストを作成する保健チーム、③避難所内の感染対策や生活改善を行う環境整備チーム――に分かれ活動した。また同日、宮城県から福島県に先遣隊2人を派遣、現地調査を行ったが、医療ニーズはなく活動を終了した。

先遣隊として現地入りした湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）小児科の浦部優子・非常勤医師は「一度出来上がった生活スペースを崩し、ダンボールベッドを設置する作業は大変でしたが、生活環境は良くなり衛生的にも改善されたと思います。23日に小学校が再開し、TMATの活動も同日に終了することが決まったので、後はそれに向け動くだけです」と語っていた。

重要なのは、保健チームの作業。避難者の状態を把握し、「リハビリテーションが必要」、「お風呂の介助が必要」など保健師が保健所に要望を上げ、個別に対応していくためだ。TMATはこれまでの情報を地域の保健師に引き継ぎ、撤収後もスムーズに避難所運営ができるよう最後まで尽力した。

環境整備チームも断水が続くなか、仮設トイレの前に手洗い場を設置したり、ダンボールベッドの配置を変えて談話スペースをつくったりし、避難所生活の改善に努めた。医療チームは延べ20人の患者さんを診療。宮城県では9日間で合計12人の隊員が活動、また仙台徳洲会病院から応援をもらい、同院から8人のスタッフが現地入りし、23日にすべての活動を終えた。

避難所内で診療活動も（宮城県、左から2人目が浦部医師）

福島TMAT理事長（後列右から3人目）が視察に訪れる（宮城県）

九州北部大雨へ先遣隊

佐賀県庁での医療調整ミーティングに参加

TMATは2019年8月29日、九州北部を中心とした記録的な大雨により甚大な被害を受けた佐賀県に先遣隊を派遣した。県内では避難所が100カ所以上に開設され、2,000人ほどが避難所に身を寄せていた。

先遣隊のメンバーは福岡徳洲会病院から4人、長崎北徳洲会病院から3人。同日昼過ぎに佐賀県武雄市の杵藤保健福祉事務所に到着し、情報収集を行った。その後、2隊に分かれ武雄市内にある避難所を訪問、その評価結果を杵藤保健福祉事務所に設置された対策本部に報告した。

夜には佐賀県庁で行われた医療調整ミーティングに参加、医師会やDMAT（国の緊急援助チーム）、日本赤十字社などと活動方針を協議した。その結果、①支援が必要な地域は大町町のみ、②避難所の環境は安定、③周辺医療機関との連携が取れており、医療ニーズがない――などの理由から、TMATとしての活動を終えることを決定した。

千葉県を襲った台風15号被災地

復旧へ積極的に支援

2019年9月8日夜から翌朝にかけて首都圏を直撃した台風15号の影響で、関東地方では広域にわたり一部浸水被害や家屋など破損被害が起こった。とくに千葉県では被害が甚大で、約64万軒が停電、断水も相次いで発生。倒木や約2000本の電柱が折れた影響で、電力復旧に時間を要し、多くの医療機関が機能を停止した。こうした被害に対し、TMATや徳洲会グループは積極的に支援活動を実施した。

徳洲会グループ病院・施設では停電被害は一時的なものだった。そのなかで四街道徳洲会病院（千葉県）は9日午後2時前まで停電被害にあった。復旧後はすぐに地域の方々に向け、携帯電話の充電場所を設置し、シャワーを無料で提供。また、周辺の主要医療機関の機能停止のため、医療機関・介護施設から21人の患者搬送を受け入れ、停電復旧から1・5日間で合計44人の患者さんの入院を受け入れた。

この時の状況について、TMAT隊員でもある同院の柳澤修平・看護師長は「すぐに停電から復旧するだろうと考えていたら、午後になっても復旧しなかったため、転院搬送が必要な患者さんのリスト化を開始しました。午後2時前に復旧したため事なきを得ましたが、半日の停電とは言え療養環境の悪化は思いのほか深刻でした」と振り返る。

10日昼頃、千葉県富里市にある中沢病院から一般社団法人徳洲会（社徳）とTMATに対し、搬送支援の要請が入った。同院は療養型で約280人が入院、停電の影響で病院機能の維持が困難となり、行政などに支援要請したものの、支援の見とおしが立っていない状況だった。要請に対し社徳とTMATは協議の結果、支援を開始することを決定した。

同日夕方、野口幸洋TMAT事務局員（社徳医療安全・質管理部係長）が同院を訪問。長時間にわたり、空調のない状態では患者さんが耐えられないこと、停電の長期化の可能性があること、停電が解消されても施設の老朽化により、すぐに復旧する保証がないことなどから、入院患者さんを近隣施設に避難させる方針を確認した。

午後7時頃、千葉県内にある千葉徳洲会病院、鎌ケ谷総合病院、成田富里徳洲会病院、四街道病院とAMAT（全日本病院医療支援班）が協力し、これら病院を含む近隣の医療機関に中沢病院から41人の転院搬送を実施。成田富里病院では11人、鎌ケ谷病院で5人、千葉病院で3人を受け入れた。

翌11日、前日の徳洲会4病院に加え千葉西総合病院、館山病院（千葉県）、武蔵野徳洲会病院（東京都）、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）、湘南藤沢徳洲会病院（同）の9病院が協力し、近隣の医療機関に69人を転院搬送。このうち成田富里病院では行政の許可を得て空床フロアを開放し、50人の患者さんを受け入れた。

12日に東京電力の発電車両が中沢病院に到着、療養に十分な電力供給が可能となったため転院搬送を中止。翌13日には電気が完全復旧し、17日に成田富里病院に転院搬送した患者さん50人を中沢病院に順次戻した。

台風被害によりブルーシートで屋根を覆う家が多数（館山市内）

南房総エリアで救援活動

TMATは14日に南房総エリアの支援を開始した。電気復旧に2週間を要する状況のなか、同エリアにある館山病院にはライフライン被害はなかったものの、多くの職員が被災していた。TMATは先遣隊として柳澤・看護師長と野口・事務局員の2人を派遣し、状況を確認した。

南房総エリアは沿岸部を中心に停電や断水が継続。安房地域医療センターは通常の2～3倍の救急を受け入れており、満床状態で、廊下やデイルームにベッドを入れて、患者さんを受け入れている状況。症状が落ち着いた患者さんの後方受け入れに難航していたため、館山病院は同センターの入院患者さん受け入れを決定、TMATはその支援を行った。また、TMATは社徳に要請し、同日中に看護師応援の手配も行った。

まず4人を館山病院に転院搬送。同日16時頃、安房地域災害医療対策会議に出席した同院の竹内信一院長は「TMATや徳洲会グループと連携し、館山病院で転院患者さんを最大限受け入れる。20人程度の受け入れが可能」と表明。安房地域医療センターの本部長は「停電が長期化するなか、まだまだ救急搬送は増加するはず。館山病院も被災された職員が多いなか、患者さんを受け入れてくれることは大変ありがたい」と感謝を示した。

15日、TMATは四街道病院の柳澤・看護師長と屋宜盛仁・事務職員、阪木志帆TMAT事務局員（社徳医療安全・質管理部職員）を館山病院に派遣し、搬送支援を実施。安房地域医療センターから同院に4人の患者さんを搬送した。さらに17日に2人、18日に2人の転院搬送があり、同院の入院数は一時200人を超えた（台風被害前の平均入院数は約170人）。TMATは19日、館山病院との協議と安房地域災害医療対策会議での方針を受け、支援活動を一旦終了することを決定した。

館山病院への転院搬送を支援するTMAT隊員

TMAT
http://www.tmat.or.jp
QRコードを読み取ってアクセス！

ホームページで情報発信

TMAT はホームページを通じ、積極的に情報発信に努めている。活動内容や活動指針、代表挨拶、定款など基本情報に加え、「NEWS・お知らせ」として、豊富な写真とともに国内外での活動の模様を紹介。TMAT が主催する研修会（災害救護・国際協力ベーシックコース、国内災害医療支援トレーニングコース）の告知なども行っている。

また、2006 年 6 月に発刊した TMAT ニュースについては、第 1 号からすべてのバックナンバーを PDF で公開。さらに、TMAT への入会案内、募金方法、研修会のプログラムの紹介など盛りだくさんのコンテンツだ。TMAT の Facebook へのリンクも貼ってある。

TMATホームページのトップ画面

病院防災プレコース TMAT 初めて開催

災害発生時の対応を学ぶ

TMATは2019年9月21日、四街道徳洲会病院（千葉県）で病院防災プレコースを初開催した。参加者は20人。同コースは災害発生時の病院の対応を総合的に学べる新しいコースだ。

講師を務めた合田医師は病院防災の重要性を強調する

冒頭、野口幸洋TMAT事務局員が「近年、台風や地震が多発していますが、病院のライフラインが途絶した際にどうすれば良いか、非常に大きな課題になっています。今回は病院防災をテーマに実践的な研修を用意しました」と説明。今回はプレ開催で、この内容をブラッシュアップしてグループ病院に展開していく予定だ。

講師はTMAT隊員である札幌東徳洲会病院の合田祥悟・救急集中治療センター医師が務め、最初に「この研修をとおし、ひとつでも新しいアイデアを見つけてほしい」とメッセージを送った。

まずは講義を実施。病院防災では防災マニュアルが重要な位置を占める。これは災害急性期の動的な対応に関し、取り決め事を記したものだが、実際に使える内容であるか随時見直すことも必要。ハザードマップ、災害対応開始基準（発災基準）、災害対応困難時基準（病院避難）、被害に応じた対応（災害レベル設定）などを網羅し、すぐにアクセスできることが大切とした。

災害医療の大原則として「CSCATTT」について解説。これはC（指揮・統制）、S（安全）、C（情報伝達）、A（評価）、T（トリアージ＝緊急度・重症度選別）、T（治療）、T（搬送）の頭文字を組み合わせたもの。さらに、各自の担当部分の行うべきことを記載した行動指針である「アクションカード」、災害時に使用する物を入れて各部署に事前に配備しておく「災害ボックス」の必要性にも言及した。

グループごとにトリアージエリアを策定し発表

講義の後はグループワークを実施。まず「発災前準備」では、グループごとに実際の四街道病院の職員を配置した組織図を作成し発表した後、EMIS（広域災害救急医療情報システム）やトランシーバー、衛星電話など通信について学んだ。次に、トリアージでは、一次トリアージとして「START法」、二次トリアージとして「PAT法」を学んだうえで、同院の見取り図を使いグループごとにトリアージエリアを策定。

赤、黄、緑タグ用スペースを確保し、出入り口を明確化、傷病者・救急搬送の動線を一方通行にするなど、留意点をもとに話し合い、それぞれ作成した案を発表した。

コースの最初と最後にテストを行いより理解を深める

続いてテーマを「発災後」に移し、マグニチュード7・3の地震で電気とガスが止まった状況を想定。大きな揺れを感じた時、スタッフはどのような行動をするか、病院としてどのような行動に移るべきかなど協議した。被災状況の確認では、縦軸に緊急度、横軸に重要度を記したホワイトボードに、集めた情報を貼り付けていくというグループワークを実施、EMISの入力方法も学んだ。

情報伝達する際のポイントを示した「METHANE」にも言及。これはM（大事故災害の発生・可能性の宣言）、E（正確な発災場所）、T（事故災害の種類）、H（危険性）、A（到達経路）、N（負傷者数）、E（緊急サービス機関）を表す。さらにクロノロジーと呼ばれる情報を時系列に記録していく手法を用いて整理した。

その後もグループワークは続き、災害レベル別対応、災害時の食料、メディアへの対応など、起こり得るさまざまな内容を想定し話し合った。最後に合田医師は北海道胆振東部地震での札幌東病院の対応など報告し、閉会した。参加者からは「実際に自分の病院を想定して学べたのでイメージしやすかったです」、「全スタッフが災害時の対応について知っておくことが必要だと思いました」など感想が聞かれた。

病院の図面上にトリアージエリアを書き込む

日本災害医学会で3演題

災害医療のあり方問う

第25回日本災害医学会総会・学術集会が2020年2月20日から3日間、神戸市で開かれた。メインテーマは「これでいいのか、災害医療!」。TMATから3演題の発表があり、過去の活動から避難所の環境改善や効果的な支援に向けた問題提起、提言を行った。

段ボールベッド導入で工夫

鈴木裕之医師
（福岡徳洲会病院救急科医長）

パネルディスカッション「これでいいのか、避難所!」のセッションで発表した。テーマは「TMAT 活動からみる段ボールベッド導入の工夫～千曲川氾濫、西日本豪雨、熊本地震の経験から～」。

近年、段ボールベッドは床に直接寝るよりもDVT（下肢深部静脈血栓症）や感染症の予防が期待できる観点から、災害時の避難所生活で有用とされている。

鈴木医長は TMAT のチームリーダーとして、台風19号（2019年）、西日本豪雨（18年）、熊本地震（16年）での医療支援活動を写真で示しながら、段ボールベッドをできるだけ速やかに導入する工夫を紹介。①避難者リストの作成、②避難所内のレイアウト作成、③段ボールベッドのメリットに対する避難者自身の理解――が前提条件にあるとして、個々の避難者の状態・状況を確認し、そのうえで家族構成や風通しなど環境に配慮しながら段ボールベッドの向き・配置を考える重要性を指摘した。また、避難所の一角に実際に段ボールベッドを組み立てた“モデルルーム”を設けることで、段ボールベッドの良さが早く伝わったエピソードなどを紹介した。

鈴木医長は現状の課題として①車中泊など夜間の状況も確認したうえでの真のニーズ把握、②避難所で音頭をとるべき保健所関係者の早期負担軽減、③避難所の人口密度の高さ――を提示。より早期導入を図るための提言として「大きな避難所には同じチームを常駐させる」、「公的チームの発災3日以内の介入」、「避難所の人口密度の調整」を示し、「すべては被災者のため、避難者の生活改善のために」と結んだ。

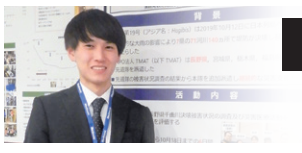
継続支援できるチーム必要

浦部優子医師
（湘南藤沢徳洲会病院非常勤医師）

「令和元年の台風」のセッションで「2019 年台風19号被害支援 宮城県丸森町での活動報告」と題し発表した。浦部医師はTMAT 隊員として10月15日から9日間、仙南保健所本部の指揮下で同町内学校体育館避難所を支援。TMAT メンバー、国際ボランティア団体、自衛隊救護班、災害支援ナース、多様な地域の保健師らとともに清掃やゾーニング、段ボールベッドの導入、公衆衛生活動、災害時診療・処方、靴箱や子どもの遊び場づくりなどを行った。

一連の活動を通じ、避難所には多岐にわたる問題があるため、医療・保健・福祉・運営まで“継続的に支援するチーム”の必要性を最も強調した。

長野市での支援活動報告



鵜澤佑・業務調整員
（湘南藤沢病院救急救命士）

一般演題で「令和元年台風第19号被害ー長野県千曲川決壊被害における TMAT 先遣隊の活動報告ー」をテーマにポスター発表を行った。2019年10月13～18日、TMAT先遣隊（医師1人、看護師3人、業務調整員2人）として、長野市保健所の指揮下で同市内の避難所を支援。このうち、約230人の避難者が生活する避難所では、仮設救護所を設営して24時間常駐。避難者の健康管理や不安軽減はもちろん、避難所での犯罪防止にも有効だったことなどを説明した。活動をふまえ「保健師以外に災害支援の活動実績が豊富な非政府組織などが介入することで、より効果的な避難所支援が可能になる」とまとめた。

東京・神奈川・山形の各徳友会

TMATに寄付金

徳洲会病院・施設の協力企業で組織する東京徳友会は2019年10月25日、TMATに寄付金を贈呈した。都内の TMAT 事務局で、同会の樋口昭久会長が福島安義 TMAT 理事長に手渡した。

また、神奈川徳友会は27日、第10回神奈川徳友会チャリティゴルフ大会を箱根湖畔ゴルフコースで開催、チャリティ協力金を後日、TMATに寄付した。大会当日は同会の会員企業から42人が参加しプレー。終了後、大会長を務めた同会の吉岡貞朗会長は参加者に謝辞を述べたうえで、チャリティの協力金は全額 TMAT に寄付する意向を参加者に伝えた。

山形県徳友会（菅原正信会長）は20年3月10日に寄付金を贈った。

国内災害医療支援トレーニングコース

有事に備え継続開催

TMATは2018年度（18年7月～19年6月、TMATは7月から翌6月がひとつの年度）に「国内災害医療支援トレーニングコース」を8回開催した。同コースは国内と海外の双方での活動を想定した従来の「災害救護・国際協力ベーシックコース」（2日間）と異なり、対象を国内に絞った1日間の研修会だ。

国内災害医療支援トレーニングコースは机上訓練と座学で構成。プログラムの中心は、災害発生からTMAT隊員の派遣、被災地での医療支援活動と撤収までの流れをシミュレーションするグループワーク形式の机上訓練だ。一方、座学では災害の定義や分類、発災後のフェーズごとの対応など「災害医療総論」のほか、「国内災害の実際」として国内の災害医療支援体制の全体像や災害時に連携が必要な行政機関、TMATの歴史や活動実績を学ぶ。

同コースを修了することにより、TMAT隊員として国内災害での活動参加要件を満たすことができる。ベーシックコース修了者は従来どおり国内外での活動が可能だ。

長野

台風19号の猛威で木が倒れ家の中にも浸水

保健所で医療調整ミーティングに参加

避難所の北部スポーツ・レクリエーションパーク

避難所内の巡回を積極的に行い避難者の様子を確認

NPO法人により、子どもの託児所支援も

自治体職員やボランティアなどと定時ミーティング

◁ 避難所の子どもたちが協力しTMATの看板を作成

ボランティアが温かいご飯や飲み物などを配布 ▷

避難者の話を傾聴する和田良美・松原徳洲会病院看護師

取材を受ける鈴木裕之・福岡徳洲会病院救急科医長

今井絵理子・参議院議員も安倍首相と一緒に避難所を視察

写真グラフで見る ── TMAT

大型台風の深い爪痕が残る被災地を奔走

地球温暖化にともない日本列島では大型台風や豪雨による被害が多くもたらされるようになってきた。2019 年、TMAT は九州北部大雨（8月27日発生）、台風 15 号（9月9日上陸）、台風 19 号（10月12日上陸）により甚大な被害を受けた地域に出動、現地調査や災害医療支援を行った。とくに大きな爪痕を残した台風 19 号の被災地での活動を写真グラフで振り返る。

宮城

豪雨で流されたゴミや木の枝が歩道に

NPO法人AMDA隊員と合同ミーティング

避難所の丸森小学校の様子

避難所内の巡回により、避難者の小さな変化に気付く

現地での移動は羽生総合病院（埼玉県）の救急車を使用

血流が停滞しないよう弾性ストッキングを使用

宮城県薬剤師会のモバイルファーマシーを活用

浦部優子・湘南藤沢徳洲会病院非常勤医師（中央）を中心に活動

笑顔で活動に励むTMAT隊員

ご協力のお願い

TMAT は皆様からのご支援をもとに精力的に活動しています！ ご協力をお願いいたします!!

1995年の阪神・淡路大震災での活動を契機にスタートした TMAT は、世界の人々の生命と健康を守るため、災害医療支援をはじめ総合的な医療支援活動を各国政府や NGO（非政府組織）、地域団体と協力しながら活動している NPO 法人です。私たちの活動は、主に企業・団体・個人の皆様から TMAT の会員として資金協力していただくことで支えられています。ぜひ、ご協力ください。

正会員年会費 …… 10,000 円
個人賛助会員年会費 …1 口　3,000 円（1 口以上）
団体年会費 …… 1 口 30,000 円（1 口以上）

クレジットカードによるご協力

http://www.tmat.or.jp/donate_on_the_credit/

※VISA/MASTER/JCB/AMEX/DINERS の各種カードがご利用いただけます。
※提携カードでは、お取り扱いできない場合があります。

振り込みによるご協力

振込先口座
- 郵便口座記号番号：00170-4-564249
- 銀行名：ゆうちょ銀行
- 金融機関コード：9900　■ 店番：019
- 預金種目：当座
- 支店名：〇一九（ゼロイチキュウ）店
- 口座番号：0564249
- 受取人：特定非営利活動法人 TMAT